

永原 順子（大阪大学大学院 人文学研究科日本学専攻）

1. 緒言

水難事故や水災害は、どの時代、どの地域においても起こりうる。人々は、それぞれの置かれた環境に合わせて、被害を未然に防ぐ方策を考えてきた。そして、それらを後世に伝えていくこともまた非常に重要であった。事故の記憶をとどめる方法の一つとして生まれたのが、事故や災害にまつわる伝承であろう。そこには、精霊や妖怪など、この世のものではない存在が多く登場している。本発表は、長い年月を経て現代まで語り継がれた各地の怪異伝承を読み解き、水難防止教育へ繋げることを試みたものである。

2. 方法

災害や水難事故とそれらを語り伝える伝承との関連性を取り上げた先行研究、各地の伝承に関するデータベースにおける事例、実際の聞き取り調査の結果等をふまえ、怪異伝承を水難事故防止教育に活用する方法を模索した。

3. 結果と考察

柳田国男は『日本伝説名彙』の中で伝説を六つの分類に分けているが、そのうちの「三、水の部」において、津波の際に白髯の老人が波に乗って沖からやってきたという〈白髯水〉の事例を挙げている。近年では、畑中章宏による災害と妖怪の関連性についての研究において、災害の記録・記憶は、妖怪に仮託されて語り継がれてきたことが指摘されている。怪異・妖怪伝承データベースにおいても、岩手・宮城を流れる北上川における白髯水の事例が散見される。

一方、斎藤英俊と宮城県農政部との協力のもと、宮城県登米郡における「姉取り沼」と呼ばれる底なし沼の伝説をもとに、ため池の危険性を喚起するポスターが作成される、といった実際の試みも行われている（図 1）。この事例は、各都道府県の伝承に基づいた伝承を用いて各地の水災害の特徴に即した注意喚起のポスターを作成できるという可能性を示唆するものである。



図 1. ため池事故防止ポスターの事例

4. 結論

冒頭に記した通り、伝承は長い年月をかけて創られ伝えられてきたものであって、各地の子どもたちが、それらを取り上げたポスターを少し見るだけでは、即効的効果は期待できないかもしれない。しかし、その地域に暮らす人々が、年齢に応じた様々な機会地域にまつわる伝承に触れることで、災害の記憶がこの世ならざる世界、すなわち異界を通して受け継がれていくことを期待したい。

高知県南国市前浜一帯では、毎年 6 月の第一土曜に「エンコウ祭り」が行われている（図 2）。その地区では、水の怪異とされるエンコウさまに酒やキュウリをお供えし、水の事故から子供たちを守る祭りであると語り継がれている。祭りに参加していたある母親は「祭りは一年に一回だけだけど、これで子どもたちが水の危険を少しでも学んでくれたらと思う。今の子どもは昔と違って川で遊ぶことはないが、用水やため池なんかでの事故はまだまだあるから…」と語っていた。怪異伝承が世代を超えて水域の危険性を共有できる時空を包摂していることがうかがえる事例である。今後も、国内外の研究者と協力しながら、怪異伝承を水難事故防止に役立てる試みを続けていきたい。



図 2. エンコウ祭りの様子

[参考文献]

柳田国男（1950）『日本伝説名彙』日本放送出版協会

畑中章宏（2012）『災害と妖怪—柳田国男と歩く日本の天変地異』亜紀書房

[謝辞] 本研究は、株式会社坂本技研との共同研究「学際的視点を持たせる地域連携教育研究」の成果によるものです。この場を借りて深く御礼申し上げます。